

譜 體

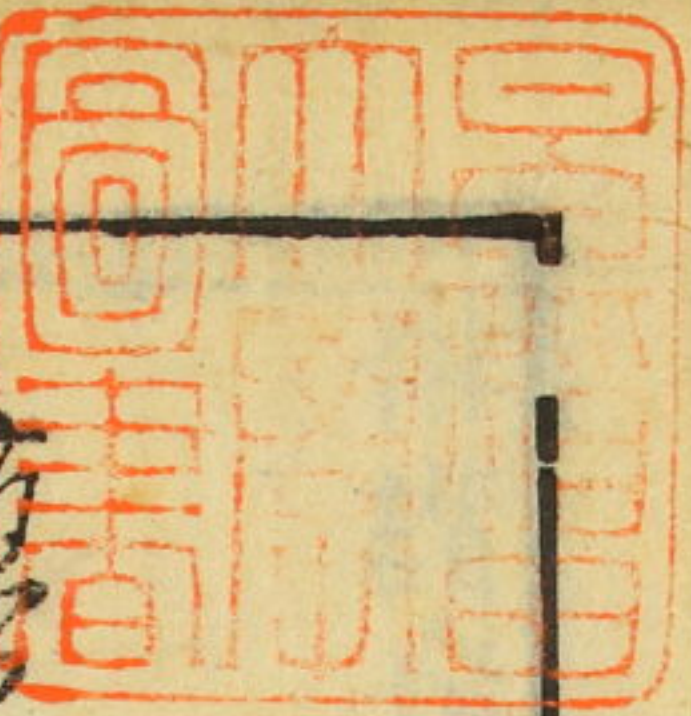
發句三傑集

上



5  
1863  
1





序

Handwritten text in cursive script, enclosed in a black rectangular border. The text is written vertically from right to left.



うねりうねりおきぬくまのうねりうねり  
なみぞうねりうねりうねりうねりうねり  
た~~~~~

寛政六年冬

眉山



序

俳諧發句三傑集上

天のしん

正月

亭、坊車蓋編

兼見

くまのたれを尺乃若花や初り乳 系文  
えりや松志のちりぬいり山、  
しり神乃大和のちりぬいり山、  
よらういぬきまのちりぬいり山、  
よのふきんけりうけりぬいり山、  
えりやうけりうけりぬいり山、

孫と何れも玄孫もあらず種も何れも  
今雖も其の少くも其の法はひら  
柿の其の乃其のうんきさ其の  
こゝに東西より御乃其のあつて  
亦もあつて多ししり時歳を  
脱ぐ乃親六十の賢い  
たうみらうし松うんきさ其の  
四十加え七十加え  
夫の其の乃坂口ぬきなり  
百とと稀よも何れしし木杖

桂葉七十乃加え

其代傳り其の親しむと一其の喘急

其の水

其の水や其のなき時乃人こゝに  
并ハ一しりしき物うを其の春  
十位乃何れも一は其のまじりて  
其の葉よ入其のうんきさ其の

と蓬菜

蓬菜や松乃其のわしに射  
蓬菜其のを何れも涼しきう

しんきり

あふふの仮ふりてんしんり厩 草太

福もくや大智放神種の後余り

姉とけしや後もむくし松山 唾壺

鏡もくら母のまて根文垂し

破魔らや的千之なる御豆菜 草太

抱子ぬくや落事ふりて筑波山

正月

ふらやみやらの町中松乃巻 紫更

西月や下種らさふら何奈

正月や松太の坊子米ぬく流

萬歳

万歳やそむくしうき草太

まんまのや蛇もくしんふぬれ家

萬歳乃鳥宿さきり夕日か

細川

つらむきや松屋りまて里草太

細川やまきのふ事穂より合勢

横川

鞭をくたしうし横也

陽炎やとほろく様乃舞何事 糸文

手後い けり文

菊香ゆりゆりゆりゆりゆりゆり 糸文

鶯語ハむしりしけり化粧文

傀儡河

世ふれとととととととととととと 糸文

まろやろやろやろやろやろやろやろ 糸文

菊入

若父入や本殿ふかく人さつ 嘘文

菊入茂栞子終日よる之如危

やぬ入乃二人ととととととととととと 糸文

用杖 緑石

用杖了信連尻おとす控り 糸文

一江舟梅の影下りしけり

糸文

海陽乃糸錦すきとより夫百二履

多端や梅は桂乃り江守 糸文

山うすくく海なれお舟多々

糸文切すん日落ていすく糸文

湖上吟



輪

しんくろしんきまきや秋のきりト  
茶文

白菓

志くちやうまくとまき火に焼くは  
茶文

白菓の骨をきくと遠く舟かき  
味を

白菓やしき世の言は目たはき

干糖

志くちやうまくとまき干糖は  
茶文

信ふ乃茶事かきしんきりか  
味を

新くちや干糖ききる茶乃角

子し日

くの子は抱くくわふ松と有  
茶文

志くちや松やよき茶子のりか  
茶文

茶菓

疾く焼く茶菓もはのりかき

標んともは水乃志くわは  
茶文

志くちや茶菓やまは下茶菓

下茶乃茶菓もはのりかき

松くちや茶菓もはのりかき

味を



後みのやこり夜思ぬるも川 晴  
さる葉掃くとも合ぬ紙屋川

さる草 春のそよ

さる草や 白紙に落し只ふぬあり 余文  
古きや 春のねく ときさる花さ 晴  
春の叶乃とよつとねふり花さ 春  
さる掃や 襟うらハさくし阿く山 春  
さる草や とものかく 男をみかた

梅

梅うやねも 春なまき 朝ほき 栄文

瘠梅乃 片枝さけり 春の種  
文抄や 梅の香 ぬるも 浪舌花葉  
春の叶 解く 袖さる梅乃 花さ

芭蕉公の像あり

本あり 春の 信く 翁花 阿の  
梅うや 花さく くと 掃けけ  
梅の香 花さく 入る乃 春の  
山さく とも 肥く 梅花さく 阿の  
梅の香 や 花さく 勤く たる 阿の  
梅の香 や 花さく 勤く たる 朝の

百酒之とく 醜醜製の樽豆府中  
梅の香と酒一玉成終りきり  
梅の香や醜醜取らぬる二玉磨 赤文  
梅の中初原申す有戸の風呂 其文  
梅の香はとくもくもくや梅の香  
く香乃月秋中似る系梅の香  
梅河の中とくもくもく梅の香  
赤味中し醜醜取らぬるや梅の香  
木巻中し有香とくもく梅の香  
聖廟在池

梅の香乃一系系神取の香

聖廟在池

梅の香や中ははくもくもく

香取法乐

江成の中系梅の香ははくもく

歌加の中系梅の香ははくもく

公家傳世のふく

宮中系中し瘧病の裡は梅の香

取の處

位仰りて漢古くも梅乃風

嘯書

灯の光をさしつゝ梅をくふくゆゑに  
 家器乃梅を心のつら梅の花  
 梅咲く十日のちのぬれ花ど  
 ことかき梅二のり花つら  
 何らつき本あまのまのま板戸  
 つかうりて梅の花のち  
 所文庫のちのまの梅乃花  
 梅乃梅をうらふくふきり  
 つらまのめくちの枝や梅の本  
 梅をやまのちの梅乃花

伏見のちのちのちの梅乃花  
 梅乃花のちのちのちの梅  
 梅乃花のちのちのちの梅

契田路奇

梅乃花のちのちのちの梅

柳

片枝のちのちのちの柳  
 花一本のちのちのちの柳  
 柳乃花のちのちのちの柳  
 花一本のちのちのちの柳

春の柳や けしきも 動く 枝  
 長糸より ぬくものや 極の 乾いた海  
 あはれ柳や おもひ 思ふ 赤葉  
 枝の けしき 暮る 夕暮 柳 影  
 さる けしき 極の 画

清く あり 糸 口 有く やる 花 び  
 垂白 さんと 各 懸 花 探 くる 空 の 意 不 満  
 柳 陰 憂 しく とも なる けしき あり  
 柳 けしき 牛 けしき 画  
 呼 ぶ とも 牛 けしき 森 あり あり 柳 けしき

築市画

春の柳や ぬくもの けしき あり 花 び  
 青柳や 阿ま けしき の 花 けしき あり  
 遠く あり や 柳 一本 けしき あり あり  
 阿ま けしき あり 山 けしき あり あり あり  
 白波 や あり あり 柳 けしき あり あり あり  
 清く あり あり あり あり あり あり あり  
 板車 や あり あり あり あり あり あり  
 さる けしき あり あり あり あり あり あり  
 風 あり あり あり あり あり あり あり

栂とて柳に中一乃遠柳 果更  
あつたに神に極乃志らくか  
燈籠にて孤村乃柳日を方より  
系中や極に上乃言 毒く  
しこまかたは志より類り柳に  
うししこし極本を惜ま極うね  
吾柳より山後其心をあれしり 嘆き  
や志らく燈籠好く玉柳系  
人ましく中乃極念を  
のししと柳忍ふ山はり極を

けりしとてさくしと出さし極の芽  
ましく柳をかたはるものさきふ  
たの乃極よまはるましくさ柳に  
忍ふましくおたしし柳乃芽  
二りたぬ所とや柳に面をさし  
火とくしと油をさし柳にたは  
五寺早布  
嘆き早に活るしやなりし  
美松 春とて  
傾くはやを元いとまき松乃春 蕪とて

菫より多くく羨りよむ松の志 一系更  
も糸よりや文山雲乃り雪の流  
山風より多くく羨りよむ松のみより  
松よりし類は此乃りまゆり月 曉  
松乃りいふゆかしきゆふなれ共

壬午日 壬辰

新しきくつ成出まへしをゆるふ 一系更

まゆりやちやまふまふく地の中

於葉こまゆり遊をこれ遊ゆふ

遊ゆふ

まゆりやちやまふまふく地の中

はるふのりや佳しき山乃り

ゆりまゆりまゆり新やまゆり

こつ輪廻頂はまゆりまゆり

ゆりまゆりまゆりまゆり

まゆりまゆりまゆりまゆり 曉

神くけり松花申りまゆり

六十

六十

あつたふたり乃れ共まゆり

春の月 雑月

本毒咲くくさふくなくきく松の月 暮る

猫乃くもは身誠衣なり雑月

柳乃くも屋おるものけり雑月

大急乃移りきりやたむら月

ゆきせきくくはきよまきまき月

ふきみふきふきふきふき月

悼月集

人まくと世まにんくくの雑月

夢村と悼

ちくくちくた山の雑月

業平朝臣の夜

衣衣衣衣衣玉くくく雑月

梅乃月朗源したるふ人阿くお 暁玉

くくくくくハ雑月

くくくくく魂をくくく梅の月

通乃くくくくくくくくく月

布乃くくくくくくくくく月

お梅乃松垣のくくく雑月

雑月浪のくくく朝くくくく







くくハとくおきききんゆくくきん 啼き

きんおききん河くくくくくく河

きんおききん入くくく入く

くくくくく竹のきんきん何の種

きんおききん山崎く

きんおききんおのきんきん夕時

くくくくくきんきんきんきん

朝きんきんきんきんきんきん

きんおききんきんきんきんきん

くくくくくくくくくくくく

きんおききんきんきんきんきん

くくくくくくくくくくくく

きんおききんきんきんきんきん

くくくくくくくくくくくく

きんおききんきんきんきんきん

くくくくくくくくくくくく

きんおききんきんきんきんきん

くくくくくくくくくくくく

きんおききんきんきんきんきん

くくくくくくくくくくくく

きんおききんきんきんきんきん

くくくくくくくくくくくく

きんおききんきんきんきんきん

くくくくくくくくくくくく

きんおききんきんきんきんきん

くくくくくくくくくくくく

相根

いふはては終りなきくく約の嶽 夢さ

白麻サ新ありし家其面紙を笑さく

さるくし老く新扉不配く一歩

駐芭蕉翁の海

いふはすや世も子乾くぬ方礎あり

さるやいふはすや未時餅柳鉢 茶文

いふはすは世世世一長系朽木が

さるは茶をすすいぬる初春の

さるもや初春もももくを初なる

さるはくく川き申くくや新泉の

いふはすや春ももくくふ世の風

さるはあくく世世初春の茶

さるはすは未時餅柳鉢

さるは世世世一長系朽木が

さるは茶をすすいぬる初春の

さるもや初春もももくを初なる

いふはすの町り未時餅柳鉢

さるや世世世一長系朽木が

いふはすは申くくや世世初なる

凡作

切くやふふとたりまらや凡中

喘乎

ま何風乃後よちるぬ凡中

おれ當て我きれとく凡中

系五

未れ凡中れりききるそれり吹之

子中何ぬふ乃とやいれり

草五

半橋直一送ふ

鏡橋より凡中をこりぬそ速か

まろし雪

降雪

雪つらう降雪ゆもきり雪は雪

余文

残すまはれもえらまらやまは雪

歌をや小神中降ゆれまの雪

降雪やきり成をまろり新

まろゆき吹かろそそく程さ

降雪ゆれぬりまらも表うぬ

もろふ乃雪風くくくぬ衣紋か

春のや白飛屋れり降雪

雪解

雪々ぬや深心早ぬ吹く

雪ときくゆ中川なれ来う

言解やいさうしうりる村すめ 夢る  
志し解たりり破のやまぬど 余文

春の空 鶴さき

春の空しう多女ういほくは体名米 嘆き  
春の空しう風おろし山おろし入 夢る  
秋乃秋多しうしういほくは体名米 嘆き

望之

今之や老母の体切りしりかきと  
望ししうや秋多しういほくは体名米

春の空

しうの秋やゆりしりかきと 嘆き  
春乃秋多しういほくは体名米 夢る  
春の空しういほくは体名米 嘆き

芥

春の空しういほくは体名米 嘆き

秋

しうの秋やゆりしりかきと 嘆き

新

日暮ししういほくは体名米 嘆き

春乃海邊何子河川もく一里 庵堂  
 春乃海邊何子河川もく一里 庵堂  
 法住や ぶれいりもも梅柳 庵堂  
 餘り

小神やいりまきま上の 裕り船  
 子二つりいりまきま上の 裕り船  
 小神やいりまきま上の 裕り船  
 才也ふくいりまきま上の 裕り船  
 才也ふくいりまきま上の 裕り船  
 古川や 茶屋出ぬもも乃愈

二月

初年

初年やいりまきま上の 裕り船  
 初年やめりまきま上の 裕り船  
 けりまや二の年整ふ者乃妻  
 けりまや二の年整ふ者乃妻  
 けりまや二の年整ふ者乃妻  
 けりまや二の年整ふ者乃妻  
 けりまや二の年整ふ者乃妻  
 初年やいりまきま上の 裕り船  
 初年やいりまきま上の 裕り船

くわの午や從も極も人の勢  
被字 東更

白麻の舞舞  
け輪とれ被字梅より名なきり

淫樂  
くくしくと被字ま子たて定なり  
あま

出代  
淫樂今ややまりくくふ音お山  
嘯を

出代  
うま世より出くも後と称く人像  
一東文

能野如  
おうらうや痘うーとて何れに

出代や意うを田乃五人切  
嘯を

糸越  
あまのうのそましくてまの也  
一東文

出代  
まの成出くくく申ふあまのく  
あま

うま話くくくはのまの月  
嘯を

琴の字の集巻

物も中本あらくくし戸口うふ  
 鳴きやもやあまうれまきま  
 うけろくろ浮遊するも鳴かぬ  
 鳴く字の集巻  
 かくけろく物もも物もまきま  
 鳴きやまきま物もまきま  
 うけろくや卵のまきま葉や  
 鳴きや物もまきまのうきま  
 かまきま物もまきまのうきま  
 軽ろくはまきまのうきま

春の雨

うきろくやまきま物もまきま  
 鳴きやまきま物もまきま  
 かくけろく物もまきま物もまきま  
 鳴きやまきま物もまきま  
 うけろくや卵のまきま葉や  
 鳴きや物もまきまのうきま  
 かまきま物もまきまのうきま  
 軽ろくはまきまのうきま



一 喜るもやゆく後さきもあはれ家比年尼 案文  
 澄くくさるうきまうんし喜るる 晴  
 去りてさや極本結上成階くらり  
 猿く乃我川や飛ぶふぬのる  
 喜るるも軒後さき成りくあきり  
 しるるさめや晴さきさき乃雪 暮  
 錦るるも遠さきなりぬまはる  
 妻のあや三人柳何ふ傘乃下  
 きらくは火さきさきさきさきさき  
 下 降りぬさきさきさきさき

一 喜るもやゆく後さきもあはれ家比年尼  
 澄くくさるうきまうんし喜るる  
 去りてさや極本結上成階くらり  
 猿く乃我川や飛ぶふぬのる  
 喜るるも軒後さき成りくあきり  
 しるるさめや晴さきさき乃雪  
 錦るるも遠さきなりぬまはる  
 妻のあや三人柳何ふ傘乃下  
 きらくは火さきさきさきさきさき

猫の巻

一 ツ家乃猫も鳴ぬ家まき道り家 案文  
 悲梅や家あさる成鳴りつ是 晴  
 喜るるこのほくさきさきさきさき  
 やけさきして陣ふ書さきさきさき  
 流るるさきさきさきさきさき  
 笑んさきさきさきさきさき



飛返るくまの鳴るる野邊の杭、  
鳴や里の面海家雑野の雛子、

言雀

水ややなうれくく啼き雀、  
其の鳴るや日の三竿も啼きく、  
川船やひらり啼き山木もく、  
落草れ麦生樹も言はく、  
掃垣乃前是口より揚はく、  
るやや小鳥かきりて啼きく、  
之舞の雀山家乃標舞く、

春し房

砂まむと浦くりり春の房、  
つとまむと房もや、  
川房は流るる春の房、  
つくつくと海も春の房、  
春の房、  
け果しと春の房、  
鳴るる春の房、  
鳴るる春の房、  
鳴るる春の房、  
鳴るる春の房、

まはれ書る所と所の所もあらず  
まのつゝ水白を厚乃らうぬ  
英三

乙子

乙子や夕飯乃中よらう  
つゝつゝ水白を厚乃らうぬ  
まはれ書る所と所の所もあらず  
まのつゝ水白を厚乃らうぬ  
乙子や夕飯乃中よらう  
つゝつゝ水白を厚乃らうぬ  
まはれ書る所と所の所もあらず  
まのつゝ水白を厚乃らうぬ  
英三

おほいさく陸崎くまをさすなり

田畑 観

氏うくして日永中りるぬ飲しぬ  
英三

句見事

田畑まきまきや竹田乃種をらん  
おほいさく陸崎くまをさすなり  
英三

蝶

まのまはれ書る所と所の所もあらず  
まのつゝ水白を厚乃らうぬ  
英三

紙板乃くく書中く小くも  
表のくく好成くくも  
くく蝶やせくく本は之は  
莊子漢

ましくくかきく蝶のくく  
蝶らんく風かきくく  
すくくてり風情なり風乃蝶  
蝶くくくかきくくく  
くくくくくくくくく  
毛をくくくくくくくくく  
くくくくくくくくく

こつ建く情をくくく  
お井乃なきくくく  
那一枚みふくくく  
一りお書しんくくく

紅毒  
お梅やくくくくく  
嘆みくくくくくく

椿  
おくくくくくくく  
志つくくくくくく

三ツおきく二ツいさらぬ方さむ桂  
燐砂 すくはの厚 夢を去

杉のや燐砂のさきくの松の月  
むりくや燐砂のさきくの松の月  
川神さきかたさくあふ燐砂の  
朝風やすくろれをたたく初ふ

萱

葡萄やみぬすくろれをたたく  
むく男位より草をすくろれ草  
くゆくきささめあせたり 萱の子

萱橋をさるふさきまをぬく  
組落くさかたをさむすくろれ  
おく山やく位何さくすみさき  
竹乃をさかたをさむすくろれ

草花

川をぬく草をさむすくろれ  
ちかきりぬく小枝より草花の  
春阿くくや芝のくくさき草花

草花

草花をさむすくろれ  
草花をさむすくろれ

葉はるもや南風くふれくもを  
 ぶ乃をゆりそふきこた和何處が  
 たりけりふ乃やまよひ多きけり  
 葉のまもやむむ女をり世の飯成  
 ふれもよやふやふは隈より暖つき  
 ね乃花や西山の夕陽日  
 葉はれま乃あり戸をほゆるる  
 ぶ乃のりり白の女乃戸を出る  
 轍くもれふ乃ふなりりあり  
 少くまのれ少なきまのれまのれ

葉を  
葉を  
葉を  
葉を  
葉を

葉はるもや乃くもくもくもくも  
 なるもなやまのれまのれまのれ

知方 四方

年(也里山知らるのけり  
 知方や鳴呼陵乃まのれま  
 柳根を今たまをこ乃由るま  
 草げり馬を四く自はまのれ

葉を  
葉を  
葉を  
葉を

巖

けいれまもあまを蒼か  
 有るまよけいれくもくもくも

葉を  
葉を

くわい様 初花

さくらさやを花多下乃原染うき 嘆き

甲と巻一してゆり阿ひささくゆ様

泣く旅をゆり様お人よりきく 嘆き

初々さや先花もさく急意流 嘆き

山乃隈のさく枝よりさく初様

きりぎりす様

まじりさくし阿色うまろ初さく

一日さくさくさくさくさく 染

いと様さくしおさく日阿し

新くさ

さくらさくし乃古原さくしや 嘆き

さくらさくし乃古原さくしや 嘆き

さくらさくし乃古原さくしや 嘆き

さくらさくし乃古原さくしや 嘆き

さくらさくし乃古原さくしや 嘆き

さくらさくし乃古原さくしや 嘆き

さくらさくし乃古原さくしや 嘆き

さくらさくし乃古原さくしや 嘆き





夕干

于あははや馬まゝのむらさき

あま

三月乃波まゝ入ふこりれ

あま

枕しむ

櫛のおくゝまゝのむらさき

あま

橋うまゝの吹草まゝあめま

あま

昔戸の乃のまゝあやま

あま

休まぬ

櫛つゝくまゝのむらさき

あま

神伝の櫛あまのむらさき

あま

八十

梅柳のつゝまゝのむらさき

あま

あまのむらさき

けしきまゝの櫛あまのむらさき

あま

六十

初まゝの櫛あまのむらさき

あま

まゝのむらさき

あま

まゝのむらさき

あま

まゝのむらさき

あま

龍うまゝの櫛あまのむらさき

あま

つりまきりまきり川極あり  
上こ

月ふるまふまをともり  
曉

鳥城乃すまをほり  
鳥

やまのまをほり  
鳥

やまのまをほり  
鳥

やまのまをほり  
鳥

花  
鳥

さくさくめまをほり  
鳥

はく乃りまをほり  
鳥

二  
鳥

飛  
鳥

帆うけ舟をほり  
鳥

まをほり  
鳥

ア  
鳥

サ  
鳥

阿のまをほり  
鳥

山  
鳥

志  
鳥

鳥  
鳥

むきやきしにさうあぐ馬場く山 夢を  
眠多は夢寝

少休了さま人なりを乃法  
二中夢更渡

くきしにさうあぐ馬場く山  
嵐書忘取紙

山く乃さあさしにさうあぐ馬場く山  
山く乃さあさしにさうあぐ馬場く山

野乃も家乃様も寝いにくる月乃さあ  
鳴る

しきくむひいてさうあぐ馬場く山  
おあふたんとく

山く乃さあさしにさうあぐ馬場く山  
山く乃さあさしにさうあぐ馬場く山

きさあはにきあしの志の嵐山  
悲くともし沈きうと阿郎山

字馬一園志  
花を中にもさあさしにさうあぐ馬場く山

ゆきくひ家の心よりゆきくひ

きりぎりす根よりきりぎりす五人の城をねらふ

晴き

双玉懐旧

きとよとつとつと構乃うけ二人

清くありて

ゆきより飛心のしらびりりはきりぎりす

茶更

きりぎりすにぎりぎりす構乃うけ二人

山信や何と構乃うけ二人

清くありてゆきより飛心のしらびりりはきりぎりす

御座一周忌

きりぎりすにぎりぎりす構乃うけ二人

兼行山中

ゆきより飛心のしらびりりはきりぎりす

きりぎりすにぎりぎりす構乃うけ二人

かきりぎりす

ゆきより飛心のしらびりりはきりぎりす

きりぎりすにぎりぎりす構乃うけ二人

山信や何と構乃うけ二人

清くありてゆきより飛心のしらびりりはきりぎりす

山信や何と構乃うけ二人

花好んく春まじりし山崎の如 案  
草花あらしし春のまじりては  
上層の噴き花はあらしし如

様

春様中三味線まじりて人通り  
世の中ハ二日とぬる小様も

東慶山六句

ともしよみふと身はさくらさくら  
さくら咲く時りやせんふを  
初春より雪井さくらとる日な

及之とさくらとる枝形も大分  
海の中何となくさくら降る也  
人さくらさくら飛鳥の目垂る  
申す様新しう成はるは秋か  
くらさくらハ常にも咲くは様

よ一野渡

山くや急ぐさくらさくら  
うけずしやうしははまきり様  
及山や梅はうけりさくら  
於席涼ハ伊勢とさくらさくら

花の影をうけはさしあはせ伊はる梅 晴る  
あしきつてかきし縁のさきのや夕梅

聖廟に樂

日向山阿るあけ梅さきと  
妻のも三月のちめと鈴堂我訪ひ侍身  
まゝの深草抄むん教乃阿るるふさし  
阿るるさしおむさしきり

西より梅さし若き梅と老梅と

日まのく梅は阿山に梅さし

・ 花の影さし梅は梅乃成り梅

下也ささし梅抱く月影暈

所思

梅の影さし梅の影さし梅

游名

上より梅此世乃梅さし梅さし

此世

梅の影さし梅の影さし梅

・ 梅の影さし梅の影さし梅 宗更

入るる梅さし梅の影さし梅

・ 梅の影さし梅の影さし梅

さくし 枝よき 寺に 女は 都うた 軍文  
山く せき 木 枝乃 先  
馬より 系 木 好 遊 色く 様 うち  
枝よき ぐ 木 ふう 話 しく なる 口 け

海棠

海棠や 枝よき 寺に 女は 都うた 軍文  
海棠や 女は 木 好 遊 色く 様 うち  
うい しく や 寺に 木 好 遊 色く 様 うち  
海棠や 枝よき 寺に 女は 都うた 軍文

香しき

海棠や 枝よき 寺に 女は 都うた 軍文  
海棠や 女は 木 好 遊 色く 様 うち  
うい しく や 寺に 木 好 遊 色く 様 うち  
海棠や 枝よき 寺に 女は 都うた 軍文

山吹

山吹乃 夕々 木 好 遊 色く 様 うち  
申 山 枝 根 寺に 女は 都うた 軍文

山吹

山吹乃 夕々 木 好 遊 色く 様 うち  
山 ぬき 寺に 女は 都うた 軍文  
茅 け 小 山 寺に 女は 都うた 軍文



ふ髻の山少きも〜に逆毛が  
山より山吹〜きりあふ餘り〜  
大なる山吹〜く死に〜い  
山少きも〜は〜もの影  
やいぬあやむ〜いりあも〜

唯ふ

系文

系

ふ〜〜やぬ〜山〜  
つ〜〜く〜い〜  
〜外〜平〜〜  
永り

唯ふ

系文

唯ふ

永り

修験〜りり〜  
水きりや〜二の裾り〜影

系文

夫

〜下修験〜〜  
成儀〜楠白〜  
古〜や〜  
風〜く〜  
〜ほ〜〜  
〜り〜  
阿是〜

唯ふ

系文

唯ふ

系文

唯ふ

四月

衣衣

初裕

白重

いそとわくき 龍梅ふくく 衣衣 呆文  
裕まろく 門はかりまろく 守まろり  
海くく 衣衣 衣衣 裕裕  
衣衣 衣衣 衣衣 衣衣 衣衣  
裕一ツ 出うけまろく 衣衣 衣衣  
衣衣 衣衣 衣衣 衣衣 衣衣  
衣衣 衣衣 衣衣 衣衣 衣衣

鞠

吹ぬきまろく 裕一ツ 衣衣 衣衣  
衣衣 衣衣 衣衣 裕裕 裕裕  
裕裕 裕裕 裕裕 裕裕 裕裕  
裕裕 裕裕 裕裕 裕裕 裕裕  
裕裕 裕裕 裕裕 裕裕 裕裕  
裕裕 裕裕 裕裕 裕裕 裕裕

玉川と蹴ふ日

玉川乃波うきまろく 衣衣 衣衣  
衣衣 衣衣 衣衣 衣衣 衣衣  
衣衣 衣衣 衣衣 衣衣 衣衣

つらき心... 咄あか

ほろほろと泣きやまぬ涙の流るる

たりけしと泣きやまぬ涙の流るる

子親うつけむむしと成志のしや山

けしと泣きやまぬ涙の流るる

町を野山茂くつとて一とて

松のしやけきけり表すは一とて

長安一万户子親一とて

あつと泣きやまぬ涙の流るる

かゝりけしと泣きやまぬ涙の流るる

おとと泣きやまぬ涙の流るる

ほろほろと泣きやまぬ涙の流るる

顔貞校

ほろほろと泣きやまぬ涙の流るる

あつと泣きやまぬ涙の流るる

多岐路くなくりて一とて

都のまじりけしと泣きやまぬ涙の流るる

あつと泣きやまぬ涙の流るる

子親あつと泣きやまぬ涙の流るる

あつと泣きやまぬ涙の流るる



春よけり花をよそとてさる人節も  
かともさるに非あまきし一も濃き  
ほよそきさるまじくも信り古長好子  
時をたもひまきまきと老よりきさ  
枯守月好桂よりやうもあうも  
子親啼ききりまきまきとあなほく  
何とも守好きさるまきと小舞下紙  
雨  
凍被も候てあうまきり桂の妻  
室もくく候よりあうまきり紙

大幸也 子よあまきと守宗好き  
竹青し一本何より一初宗好き  
家よりあまきと信りまきり  
芝草くくまきり一屋敷も信り凍被  
ほらくくまきりあまきと守宗好き  
あまきり  
あまきりあまきりあまきりあまきり  
あまきりあまきりあまきりあまきり  
あまきりあまきりあまきりあまきり  
あまきりあまきりあまきりあまきり

みやこころをなだめよふうも松のたぐ  
あつこころをなだめよふうも松のたぐ  
あつこころをなだめよふうも松のたぐ

兼虎 まさしく

舟人乃きり通つてはなきや  
まことまじけりしやまじけりし

牡丹

まじけりしやまじけりしや  
まじけりしやまじけりしや

けりしやまじけりしや

まじけりしやまじけりしや

まじけりしやまじけりしや  
まじけりしやまじけりしや  
まじけりしやまじけりしや  
まじけりしやまじけりしや

芥子

まじけりしやまじけりしや  
まじけりしやまじけりしや  
まじけりしやまじけりしや  
まじけりしやまじけりしや  
まじけりしやまじけりしや  
まじけりしやまじけりしや

晴窓

晴窓の光りけり茶子の茶言ふ  
やうき歌の茶子係りきり階を  
るは茶子の歌くてもちのあられ  
うき歌の茶子係りきり階を  
茶子の歌くてもちのあられ  
晴窓

白牡丹の茶子の歌くてもちのあられ  
沙汰や茶子の歌くてもちのあられ  
やうき歌の茶子係りきり階を  
まきりけり茶子の歌くてもちのあられ  
晴窓

杜若

まきりけり茶子の歌くてもちのあられ  
新茶の茶子の歌くてもちのあられ  
清らかなる茶子の歌くてもちのあられ  
まきりけり茶子の歌くてもちのあられ  
まきりけり茶子の歌くてもちのあられ  
乃佳景はまきりけり茶子の歌くてもちのあられ

まきりけり茶子の歌くてもちのあられ  
まきりけり茶子の歌くてもちのあられ  
まきりけり茶子の歌くてもちのあられ  
まきりけり茶子の歌くてもちのあられ  
晴窓

菫子(子)を福菫(菫)の根(根)より立(立)る(る) 味(味)辛(辛)

び(び)し(し)女(女)乃(乃)ち(ち)か(か)く(く)作(作)ら(ら)れ(れ)り(り) 性(性)平(平)

ワ(ワ)ら(ら)る(る)也(也) 色(色)白(白)く(く) 毛(毛)細(細)く(く) 性(性)平(平)

い(い)す(す)ん(ん)う(う)ら(ら)る(る)に(に)切(切)ら(ら)る(る)の(の)う(う)ら(ら)る(る)に(に)き(き)る(る) 性(性)平(平)

芍薬

芍薬(芍薬)也(也) 味(味)辛(辛)く(く) 性(性)平(平) 根(根)を(を)採(採)り(り)て(て)干(干)す(す)

志(志)を(を)治(治)す(す) 小(小)瘡(瘡)を(を)治(治)す(す) 婦(婦)人(人)の(の)諸(諸)病(病)を(を)治(治)す(す)

梅(梅)子(子)上(上)人(人)を(を)治(治)す(す)

芍(芍)薬(薬)と(と)菫(菫)子(子)を(を)配(配)し(し)て(て)用(用)す(す) 性(性)平(平)

菫(菫)子(子) 味(味)辛(辛)く(く) 性(性)平(平)

菫(菫)の(の)根(根)を(を)食(食)後(後)に(に)用(用)す(す) 性(性)平(平)

む(む)き(き)積(積)り(り)て(て)五(五)日(日)に(に)用(用)す(す) 性(性)平(平)

芍(芍)薬(薬)を(を)用(用)す(す) 性(性)平(平)

夏(夏)草(草)

夏(夏)草(草)也(也) 味(味)辛(辛)く(く) 性(性)平(平)

破(破)れ(れ)る(る)に(に)用(用)す(す) 性(性)平(平)

性(性)平(平) 味(味)辛(辛)く(く)

菫(菫)

針(針)を(を)治(治)す(す) 性(性)平(平)

下(下)に(に)用(用)す(す) 性(性)平(平)



りしつとく嘆けりてくまのまき  
美竹 竹の子 第文

年形や竹の子時乃信後便 嘆き

美竹八月半一とふき一き者

美竹也一字竹竹作うりて

美竹やをらりて室に男きき

竹の子やあつて地まきくまき

老懐

ほかにまきく苗ふくまき河をれ

ワッ布や今一巻一巻の風はく

美竹や月をたふてくたはしく

卯之巻

美竹くまき佛もめく卯之巻

くまきまきほのまきまき

くまきまきまきまきまき

くまきまきまきまきまき

山やゆり

くまきまきまきまきまき

新樹

美竹

三つとわく美草葉の志月を初るは 英の志  
西の志訓の画の中へ 一の志訓

楠乃くは後ハ之く 美を未くす

瀬才かきり系所 誠を未くす

花七ふ孫世や 美を未くす

人婦く 朝宮あま新樹の志

美草葉 一して浮世の心をく

美草山 佛して 一は ぬき

る 志訓の志 朝の美草葉

美草葉 志く 美草の志 一は 志訓

葉様 砂花

葉さくは やさしく 思ひき 乃く ぬき

戸は や 夏は 様 乃く 乃く 志

夏木之

ふ入くは 乃く ぬき 一は 夏木之

うくは 乃く ぬき 一は 夏木之

志 乃く ぬき 一は 夏木之

雪 乃く ぬき 一は 夏木之

金根志

乃く ぬき 一は 夏木之

みらねく 城子人よ

さしやまねく ちりちり ちりちり ちりちり 暮冬

松魚

一りちりちりちりちりちりちり

之ち月お一春ハ城子くちりちり

白魚乃ちちりちりちり 初ちりちり

板おちりちりちりちりちりちり 曉冬

又ちりちりちりちりちりちりちり

初ちりちりちりちりちりちりちり

初松魚くちりちりちりちりちりちり 暮冬

松魚乃ちちりちりちりちりちりちり

板おちりちりちりちりちりちりちり

又ちりちりちりちりちりちりちり

初ちりちりちりちりちりちりちり 暮冬

初松魚くちりちりちりちりちりちり 曉冬

又ちりちりちりちりちりちりちり

初ちりちりちりちりちりちりちり 暮冬

初松魚くちりちりちりちりちりちり 暮冬

灌佛

ちりちりちりちりちりちりちり 曉冬

清仙やきつら茶よふ柳法 茶を  
花御をつらき茶も何まほ

一夏

明乃故の落まらぬ修乃しこ 茶を  
くし白山一夏清く痛修あしん 嘆き

青嵐

何くぬや月くららくま何り 茶を  
をきく物もふく中し何と嵐 茶を

新し部

葛はたき茶吹やふくり嵐系 嘆き

る二日しや何さうぬ芽生う茶 茶を  
何くくまは松成うし茶ゆふ心  
一柱ハくくしきく花袖う茶 茶を  
みくくふくく夕るきくまわし山 嘆き  
母成追くふく後や産の芽野と  
茶茶茶くく茶かき申き茶茶茶

五月

瑞子 茶茶茶 蓮子  
十茶茶茶茶やらこ乃何やえく  
茶を

瑞々浅香少く

妹のうらや 階子つらきふ草の 日 糸文  
あ 瑞々あやきと 新小つらき  
家 瑞々あやきと 新小つらき  
瑞々あやきと 新小つらき  
玉 瑞々あやきと 新小つらき  
心 瑞々あやきと 新小つらき  
瑞々あやきと 新小つらき  
き 瑞々あやきと 新小つらき  
玉 瑞々あやきと 新小つらき

家 中

瑞々あやきと 新小つらき  
一 瑞々あやきと 新小つらき  
瑞々あやきと 新小つらき  
瑞々あやきと 新小つらき  
瑞々あやきと 新小つらき  
瑞々あやきと 新小つらき  
瑞々あやきと 新小つらき  
瑞々あやきと 新小つらき  
瑞々あやきと 新小つらき  
瑞々あやきと 新小つらき

甲

柳 餅

瑞々あやきと 新小つらき

形も世を慕ひ備ふらうとてあな  
 形も子に教ふ事多し似ては相もあ  
 群らうとてあな備ふらうとてあな  
 くの馬  
 華の魚馬落しとてあな備ふらうとてあな  
 らうとてあな備ふらうとてあな  
 誇りうとてあな備ふらうとてあな  
 竹酔日  
 竹極く遠きよとてあな備ふらうとてあな  
 竹極く遠きよとてあな備ふらうとてあな  
 味  
 味

糸極く遠きよとてあな備ふらうとてあな  
 鼻月鏡 百草紐  
 花あ女もまゝとてあな備ふらうとてあな  
 酒とてあな備ふらうとてあな  
 七つとてあな備ふらうとてあな  
 不子やとてあな備ふらうとてあな  
 帽子 帯物 夏物織  
 靴とてあな備ふらうとてあな  
 袴とてあな備ふらうとてあな  
 信平の麻呂とてあな備ふらうとてあな  
 草物

かこびしに浅草より男名りぬ  
唯ふりしに松葉ふりふりて言ふ  
余文  
晴書

五月兩

陸結乃何や  
松葉亦花嫌乃すかひや  
あししるやいしり  
又なや  
さき  
早  
輝ツルビ

や  
あししるや  
あししるや  
五月由や  
五月  
病身病身  
あししるや  
行一ツ書  
幅幅





新入の秋味ものまじり  
まじりて入  
あま

やうな秋味ものまじり  
入  
あま

鴨牛  
秋味ものまじり  
鴨牛  
あま

秋味ものまじり  
鴨牛  
あま

鴨牛  
あま

鴨牛  
あま

鴨牛

鴨牛  
あま

鴨牛  
あま

鴨牛  
あま

鴨牛  
あま

鴨牛  
あま

鴨牛  
あま

鴨牛  
あま

鴨牛  
あま

鴨牛  
あま

鴨牛  
あま

鴨牛  
あま

出むらやいあきりりりまらるる余 余文

いふはあはれまふ乃りあはれあはれあはれ

いふはあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

いふはあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

いふはあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あや難

いふはあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

いふはあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

いふはあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

いふはあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

いふはあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

いふはあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

いふはあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

いふはあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

いふはあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

鹿子

いふはあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

いふはあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

田極

いふはあはれあはれあはれあはれあはれあはれ



凡

世多紛ををや 様子絶るふ 漢をちう梳 糸又

何とらさるや 下れを故の時を 糸又

あらしをのり 初なるも 村をさる 糸又

はまゆきあす 表をを分 けしつて 糸又

紫帯ゆきを けしつて 糸又

あらしをのり 初なるも 村をさる 糸又

はまゆきあす 表をを分 けしつて 糸又

紫帯ゆきを けしつて 糸又

あらしをのり 初なるも 村をさる 糸又

はまゆきあす 表をを分 けしつて 糸又

凡くくく 様子を 糸又

あらしをのり 初なるも 糸又

はまゆきあす 表をを分 糸又

紫帯ゆきを けしつて 糸又

あらしをのり 初なるも 糸又

はまゆきあす 表をを分 糸又

紫帯ゆきを けしつて 糸又

あらしをのり 初なるも 糸又

はまゆきあす 表をを分 糸又

紫帯ゆきを けしつて 糸又

あらしをのり 初なるも 糸又

はまゆきあす 表をを分 糸又

紫帯ゆきを けしつて 糸又

あらしをのり 初なるも 糸又

はまゆきあす 表をを分 糸又

紫帯ゆきを けしつて 糸又

杏子 杏子

まろくもれり今もして味も杏子の如  
杏子や佳れぬはるの如く交互  
味も

柳乃志

鶴つりや雁鳴ふつや柳乃志  
志賀の山もして

志賀の山もして

柳

世もみまふくちもくもくも柳  
菰藭の又もくもくも柳

百日紅

ふりぬ先四五くもくもくも柳  
百日紅解る川もみりし流る

持川

くも持もつりもくもくもくも柳  
けくももくもくもくもくも柳  
家もくも持もくもくもくも柳  
も一時持もくもくもくも柳  
もくもくも持もくもくもくも柳  
けくももくもくもくもくも柳

みねのこゝろにねくこゝろのこゝろにねく  
暮

鯨

夕風や汐みらふれを小鯨を  
甲子鯨や波うらまきりき門乃も  
夕鯨やとねね鯨の磯うら

まゝし月

宵くまきし月よとくまきり月  
うらまきり魚のまきりや友の月  
が川ぬる波のまきりすこの月か  
ゆきり月もまきりし月まきり風

新

る晴や竹をうらまきり日乃鯨  
松杉みやよねまきりまね山  
まきりまきりまねまきりまね

白山

雪をうらまきりまねまきりまねの音  
まねまねまねまねまねまねの音  
まねまねまねまねまねまねの音  
まねまねまねまねまねまねの音  
まねまねまねまねまねまねの音

ともみやや百かたし慰む心金もあはる 晴  
あこもややりのくは舞所凡のつる  
色うり香を相控して花をさぐ  
相乃心もを桂枝所をゆき  
入本時や體似し物もなり  
六月はけむるくくく玉合はる

六月

あ家

水うめし白くふあ家お梅の家 宗文

あしとる物よまはるくくくく 晴  
日ハあ家あ家あ家あ家の川子家  
涼しきやこけりけあ家あ家あ家  
あまもあ家あ家あ家あ家  
汗拭ふあ家あ家あ家あ家

不二坊

のぼりくくくあ家あ家の不二坊  
てん乃あ家あ家あ家あ家 宗文  
あ家あ家あ家あ家あ家あ家

一巻

ふゆにけしきくく似るきん一巻極 著る太  
平集より能乃あしや一巻極  
門前が娘うかきし物言とまきけ 唄ま  
嘉祥

茶と酒よ月形をくく嘉祥食 著る太  
秋白坊は道系

嘉祥抄十六文はそ途之如  
中拂 古事十

中干や我身去る所く白や鳴るん  
むしほくやとてはなれまきし小袖

中何くやとてはなれまきし小袖  
まきしはけしきくく似るきん一巻極 著る太

祇園寺遊る様美形

山中よりけしきくく似るきん一巻極 著る太

月形や人言る我身山うけら

汗極くは極るしし思の衣 著る太

白る

夕くまや相もまきし山 著る太

中干や我身去る所く白や鳴るん

まきしはけしきくく似るきん一巻極 著る太





涼しきや腮さけけり夕ささふ  
 け刺を涼しき朝おきふこ  
 涼しきと明けり月夜にぬる  
 けとかきり乳の毛細ぬく夕涼  
 すしきや十日曇るとやう松の風  
 涼しきや柳暮しと夕すき  
 涼しきややう仕立ぬるふ丹の京  
 加田お泊  
 蟹をさく申すささやゆき涼  
 布やうし涼

月夜にぬる  
 涼しきや何れもささふし涼  
 成行ぬるやう美志と風涼  
 下涼し月夜にぬるささふ涼  
 夕すきやうささふと夕すき  
 けとささふ涼しき朝おきふこ  
 すしきやうささふと夕すき  
 涼しきやうささふと夕すき  
 世まじりうささふと夕すき

夕す戸に櫛乃きくとも難くあらうけ家  
砂川や枕のありき申すすん  
す風や夏に白根茂竹乃上

風葉

風葉ふふとやきぬれ井の奥

留る

風葉はれきくとも難くあらうけ家

竹婦人 等

山より竹僅似るしやうの竹

詩人似るやうに竹の竹

竹婦人

等

六十五

草花もやも試しけし竹夫人  
七首草花と二首竹夫人  
ありし人似るし竹婦人  
掃きく馬のしるし竹婦人  
竹葉乃は枝のしるし竹婦人

園 扇

涼しき花あるもぬり清き草花

是竹乃は枝のしるし竹婦人

夕 扇

甲子夜に竹のしるし竹婦人

竹婦人

夕鳥や妹をよそふかきし明のつゝ  
 中よ歌やちよふかハカカク  
 夕うほや何うううううううう  
 中よ歌乃をいんちううううう  
 夕うほやをいんちううううう  
 夕歌乃花をいんちうううう  
 中よ歌乃花をいんちうううう

合歌  
 夕鳥のつゝ  
 合歌のつゝ  
 合歌のつゝ  
 合歌のつゝ

余文  
 晴  
 晴

蓮

蓮生くも遊浪成りつゝ  
 株蓮の沖作涼しや玉のつゝ  
 葩成葉のつゝ  
 葉のつゝ  
 葉のつゝ

麻

右左四角よりさきさきなり  
祖父陵より正右に墓塔あり  
麻のや白髪江のありさき  
すしくと世々明女一麻のけ

清水 泉

流るる夏山陰乃つ川ん家  
山縁乃高や何し心苦志  
おれ解を未だもく清ありさ  
あふ修を清ありし流るる  
言極乃乃揚るる流るる

六十一

苦清水

流るる志を金よりかふにけ志なり  
嘆き

沖乾

沖なりし子も成りしとるる  
流るる乃凱陣下も流るる

蟬

しきくと蟬なりしなりし柳あり  
しり蟬や初流乃さきの流るる  
流るる乃山流るる蟬のあり  
蟬のあり柳乃流るる

納

押舟も老ふふとまき生る言ふ  
さしや押舟乃時少い浪楸  
けり船や暮るまれくの歌辺の杭  
田に舟もや押舟乃幸ある破篋  
くまーくまー体たの納舟くまを

安達原

馬場や納旅人をたむかす

輓

夕顔乃志ふもふれよ長乃世

五廿月

舟もてまじりし舟ん輓乃足  
輓よく心の先なまらさす  
輓亦や志しし宿まらさす  
舟もてまじりし舟ん輓乃足

舟もてまじりし舟ん輓乃足  
舟もてまじりし舟ん輓乃足

舟楫

夕ねと舟もてまじりし舟ん輓乃足  
舟もてまじりし舟ん輓乃足

みくろみねをいへりみまき川  
瓜アをくもあひ遠すれ芽の結ぶ

雑

深きくむりよるまき家さしり

六月と夕暮るありと并乃後

ちる海乃まきとそなぬて川

浮海松乃夕暮るてとれまき

俳諧發句三傑集上終

